

令和2年8月14日

令和2年度病害虫発生予察注意報（第1号）

和歌山県農作物病害虫防除所

1. 病害虫名：トビイロウンカ
2. 対象作物：普通期水稻
3. 対象地域：県北部および中部
4. 発生量：多
5. 注意報発表の根拠
  - 1) 県北部における8月中旬の発生ほ場率は65%（平年10%）、25株あたり成・幼虫数は2.5頭（平年0.4頭）、県中部における8月上旬の発生ほ場率は100%（平年17%）、25株あたり成・幼虫数は15.0頭（平年1.5頭）で、いずれも過去10年間と比べて最も多い（表1、2）。
  - 2) 予察灯による6月上旬から7月中旬の誘殺数は、紀の川市12頭（平年0.7頭）、上富田町157頭（平年0.7頭）、那智勝浦町172頭（平年3.2頭）で、いずれも過去10年間と比べて最も多い。
  - 3) 大阪管区气象台が8月6日に発表した向こう1か月の予報では、気温は高い確率が70%、降水量は平年並または少ない確率がともに40%と予想されており、本種の増殖を助長する気象条件である。
6. 防除上の注意事項
  - 1) トビイロウンカ（図1）の発生量は地域間やほ場間で大きな差があるため、ほ場毎に発生状況を確認する。なお、同一ほ場内においても発生に偏りがあり局所的に多発することから、ほ場の全体をよく観察する必要がある。
  - 2) 本種は増殖率が高いため、現在は低密度のほ場でも8月下旬以降に高密度となり、坪枯れ被害（図2）を引き起こす恐れがある。定期的に発生状況を確認し、1株あたり5頭以上の成・幼虫を確認したら、早急に薬剤防除を実施する。
  - 3) 本種はイミダクロプリド剤、チアメトキサム剤、クロチアニジン剤に対する感受性の低下が認められているので、防除薬剤の選定に注意する。
  - 4) 粉剤、液剤の散布に際しては、本種は株元に生息するため、薬剤が株元に十分到達するように散布する。粒剤は、有効成分が根から吸収されるため、効果が現れるまで時間がかかる。
  - 5) 薬剤散布にあたっては、各農薬の使用基準を遵守する。収穫期が近い場合は、特に使用時期（収穫前日数）に注意するとともに、周辺ほ場への飛散防止に努める。
  - 6) 防除薬剤は最新の登録情報（（独）農林水産消費安全技術センターの農薬登録情報提供システム [https://www.acis.famic.go.jp/index\\_kensaku.htm](https://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)）を参照し、適正に使用する。

表1 トビイロウンカの発生状況（令和2年8月上～中旬） 25株あたり虫数（頭）

地域	調査地点	幼虫	成虫	計	（平年）
県北部	和歌山市 谷	0	2	2	
	和歌山市 直川	2	1	3	
	和歌山市 和佐関戸	0	7	7	
	和歌山市 朝日	0	2	2	
	和歌山市 小瀬田	0	4	4	
	海南市 別院	1	7	8	
	海南市 次ヶ谷	1	2	3	
	紀美野町 福田	0	0	0	
	紀の川市 丸栖	0	0	0	
	紀の川市 井田	0	2	2	
	紀の川市 西三谷	0	0	0	
	岩出市 中迫	1	9	10	
	橋本市 山田	1	0	1	
	橋本市 赤塚	0	0	0	
	かつらぎ町 下天野	0	0	0	
	かつらぎ町 西飯降	0	1	1	
	広川町 広	0	0	0	
平均				2.5	(0.4)
県中部	御坊市 野口	0	1	1	
	日高町 高家	9	0	9	
	印南町 印南原	1	1	2	
	みなべ町 西本庄	36	3	39	
	日高川町 和佐	5	1	6	
	日高川町 熊野川	9	0	9	
	田辺市 甲斐ノ川	28	11	39	
平均				15.0	(1.5)

注)ほ場における払い落とし調査

表2 トビイロウンカ発生状況の推移（8月上～中旬）

	平成22年	23年	24年	25年	26年	27年	28年	29年	30年	令和元年	2年	平年	
県北部	発生ほ場率 (%)	29	18	12	18	0	0	0	12	0	12	65	10
	25株当たり虫数(頭)	1.4	0.2	0.1	1.5	0	0	0	0.4	0	0.2	2.5	0.4
県中部	発生ほ場率 (%)	0	43	14	14	14	0	14	0	0	71	100	17
	25株当たり虫数(頭)	0	0.6	0.4	0.1	0.4	0	0.1	0	0	12.9	15.0	1.5

注)ほ場における払い落とし調査（調査ほ場数：県北部17、県中部7）



図1：トビイロウンカ成虫  
長翅型(左)、短翅型(右)



図2：トビイロウンカによる坪枯れ被害  
(令和元年9月、和歌山市)

和歌山県農作物病害虫防除所  
電話：0736(64)2300